

## 論文審査の結果の要旨

### Acute Poststroke Depression Is Associated with Thalamic Lesions and Clinical Outcomes: A Case-Controle Study

#### 急性期脳卒中うつと視床病変および予後との関係

日本医科大学大学院医学研究科 脳神経外科学分野  
研究生 大村 朋子

Journal of Stroke and Cerebrovascular Disease 27(2018) 499-505 掲載

高齢化にともない脳卒中は増加しており、後遺症対策が重要である。脳卒中後遺症の一つである脳卒中うつ（PSD）は予後への悪影響が指摘されているが、その病態は未だ不明であり、認識や対策も不十分である。今回申請者らは、脳卒中急性期における PSD の責任病変、リスクファクター、および予後への影響を研究した。2014年11月から1年間に千葉北総病院脳神経センターへ入院した脳卒中（一過性脳虚血発作を除く）348例から、意識障害や重篤な合併症例を除いた175例を対象とした。男性108例、女性67例、平均年齢68.2歳、病型は脳梗塞138例、脳出血25例、くも膜下出血12例であった。PSDのスクリーニングは、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders に準拠するうつに関する9の質問で構成された Patient Health Questionnaire-9（PHQ-9）を使用し、入院5～30日間に行った。リスクファクターとして、性別、年齢、病変部位（前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉、視床、内包、放線冠、被殻、橋、延髄、小脳に分類）、各種併存疾患、嗜好歴、脳卒中既往歴との関連について調査した。また、脳卒中重症度を入院時 National Institutes of Health Stroke Scale（NIHSS）、機能予後を最終退院時の modified Rankin Scale（mRS）を用いて調査した。175例中41例（男性24例、女性17例、平均67.7歳）が PSD と診断された。PSD の重症度は、軽症15例、中等症18例、やや重症8例であった。多変量解析によって、両側の視床、NIHSS 高値が、PSD 因子であることが示された。予後調査では、急性期在院日数は2群間で差はなかったが、合計（急性期+回復期）在院日数は PSD 群が長期であり、入院時 NIHSS と退院時 mRS も PSD 群が高値であった。PSD 群を軽症、中等症以上に分けた3群比較では、中等症以上 PSD 群は退院時 mRS と合計在院日数とも高値であり、合計在院日数は重症度と相関していた。過去の研究で、急性期 PSD への左半球病変の関与は多数報告されているが、責任病変は未だ特定にはいたっていない。その理由として、PSD は長期間に発症するため、病態が変化し、様々な報告が混在していると思われる。急性期を発症30日間とした本研究では、視床病変が PSD に関与していることが示された。本研究では、急性期脳卒中中の23%に PSD を認め、視床病変が PSD 発症に関与することが示された。

第二次審査では、上記の内容に加え、脳梗塞・脳出血など疾患による影響、視床が PSD を引き起こすメカニズム、意識障害や高次機能障害における PSD 評価の問題点、急性期という短期間内での PSD 評価の問題点、PHQ-9の妥当性、今後の具体的な展望などについて広く質疑がおこなわれたがいずれも適切な回答がなされた。

本研究は急性期脳卒中において視床病変が PSD 発症要因であることを初めて明確にした研究である。PSD は予後への悪影響をおよぼすことも明らかとなり、PSD 治療の必要性が示された。よって本論文は学位（医学博士）論文として価値あるものと認定した。